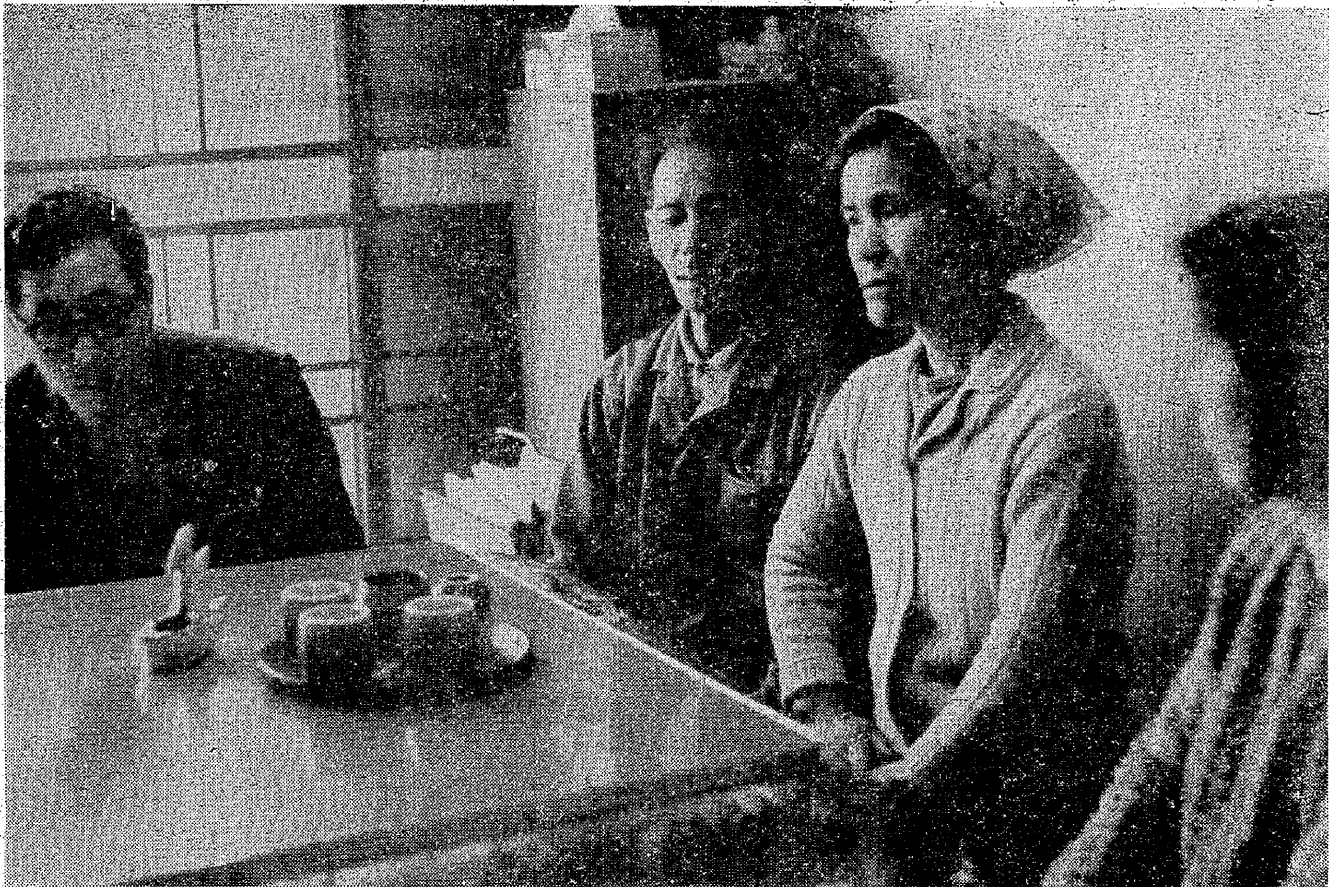


原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号

第四十七号



新しく建てられた家のこと、柱も壁板も光りかがやいていた。茶の間にすわった吉田さん。妻のヨシ子さんは、「孫のつもりで世話をしております」と、とホトホト語ったが……。

補償打ち切り

CO患者の吉田頼義さんは、大牟田市菅原町三丁目七八の五に居住。長く住んでいた野添社宅をひき払ってここに越してきたのは、停年のため三池炭鉱をやめたあとのこと。

今の住まいは、自宅。
大正五年七月二日生れの彼は、ことし五十九歳。

本来なら、満五十五歳を迎える昭和四十六年の七月には停年で退職しなければならなかったのが、三池のCO闘争が、三井鉱山をして彼に対する補償をつづけさせることができたため、二年ばかり伸びて四十八年に退職となった。

CO中毒症が治つていようが、治つていまいが、そんなことはほとんどかまわぬ自民党政府のこと。その政府の手で、吉田さんが有罪をいわず押しつけられた障害等級は、十二級だった。二十万円でよとの手切れ金(一時金)とひきかえに、ポイ。

吉田さんは、それよりさかのぼる四十一年十月、数多くの患者なかまとも労災補償を打ち切られた身。

それに、こんど二方面的障害等級の追い打ちだったのである。

「高血圧、自律神経障害、神経痛、記憶、計算、思考などの障害により、療養継続を必要とする」労災補償打ち切り先だ。三池労組のCO患者担当医師団の責任者——金子嗣郎医学博士(東京都立松沢病院副院長)も、こう診断をくだしていたというのに。

家族のこと

吉田さんは、昭和十八年六月十六日、今もつれ添っている妻ヨシ子さんと結婚。彼が二十七歳、ヨシ子さんが二十二歳(大正十年十二月一日生れ)のとき。

三井三池炭鉱に入社したのは、

それから三年後の二十一年二月十五日。三川鉱の、乙方坑内運搬夫として。

夫婦は、以後前記の三井三池野添社宅で暮らしを立えた。

次つぎに、子どもが生まれた。二十一年八月二十二日、長男浩

CO患者・吉田さんの実態

もう帰る、となまき健康

スリッパをつっかけたまま、さつさとコタツへ

「恩返しのため世話をし」と妻

二十四年十一月十八日、長女ふささん。

二十七年八月十九日、三男(次男は生後死亡)辰雄さん。

二十九年八月十九日、次女さかえさん。

三十一年九月一日、三女和子さん。

三十六年五月二十二日、四女千代子さん。

以上六人。吉田さんは千代子と

じめ五人の子どもが、すでに自活

するが、嫁に行くかして、今も両親のもとで過ごしているのは

中学二年の、末っ子の千代子一人きり。

とはいえ、六人の子どもをおんぶしての炭鉱夫の暮らしはきつ

収入がガタツと減った。

生計を維持して行くには、いきおいよほどの才覚を必要とした。

あの大太平洋戦争のとき、海軍の上等兵曹として海洋を駆けめぐった

ほどの彼のことが、現状に負けることもなかった。

三川鉱坑内運搬夫として働くかたわら、思いつくまま商売をやつてかきめくつては不思議なくらいもうけた、という。

せんべい焼き、ポン菓子のおき、はぜの実ちぎり、畑を開いては野菜づくり。

なかでも、はぜの実(製粉原料)ちぎりなど、ときには人手を十一人もよつたことさえある。

「千代子さんだったとはいいいながら、そのため主人は、三井三池の

たまりかねて、妻のヨシ子さんは女のお身にもかかわらず土方仕事へ。それは、今も。

吉田さんは、昭和四十一年秋に等兵曹として海洋を駆けめぐった

ほどの彼のことが、現状に負けることもなかった。

三川鉱坑内運搬夫として働くかたわら、思いつくまま商売をやつてかきめくつては不思議なくらいもうけた、という。

せんべい焼き、ポン菓子のおき、はぜの実ちぎり、畑を開いては野菜づくり。

なかでも、はぜの実(製粉原料)ちぎりなど、ときには人手を十一人もよつたことさえある。

「千代子さんだったとはいいいながら、そのため主人は、三井三池の

そして、とうとう大牟田地評署片方の右の足先につっかけたまま

さつさとコタツの間にとり返し、そのうえそのスリッパをなおつかけ

たまま、コタツに下半身をさしこみながら、私の方を見て「さあ」と手を伸ばしたのには、あつ

けにとられてしまった。

私、あまりのことにとまどつて、側でお茶の用意をして

いた妻のヨシ子さんが声をあげた。

「お父さん。それ、またスリッパをはいたままコタツにはいつたりして。早よう、眠がね。……これですから」

われながらあきれ顔で、吉田さんはしきりに頭をかくいた。

こんな体の吉田さんに対し「症状が固定したから」と労災補償を打ち切るなど、いったいこの国の政府だからやれる仕打ちか、と思

わずカトツと怒りが燃えあがり、体のなかの血が逆流した。

吉田さんに聞けば、たとえ何度足を運んでも、職業安定所は、どうやらCO患者だということで仕事をあつせんしなかった。「一方で

中毒がよくなくなったようなどいいながら補償を打ち切つておいて、その政府の同じ機関が一方では中

毒はまだ治つていないから、と就職のあつせんはない。こげん矛盾したやり方があるか」と、

吉田さんが怒りをもちまけるのは当然だ。許されてよいはずがない。

「つらいめにあわされたものですね」と、妻のヨシ子さんに同情すると、ヨシ子さんはボツリとい

った。「長女にもう、孫が一人生まれまして、私は自分には孫が二人いるのだとあらためて、主

人の世話をさせてもらつています。第一この人が元気なとき、あんなにも働いて子どもを育ててく

れたことを思い出すと、私としてはまた恩返しのためでもあり

ますから」と。

私にいうべき言葉はなかった。私にいうべき言葉はなかった。

宿命背負い

たとえ入院を必要でなかったものの、まぎれもなくCO中毒患者の宿命を背負わされてしまった

吉田さんは、今は病院に通う身と

なつてしまった。

労災補償保険からの休業補償給付は六割。それに、三池労組が勝

ち取った三井三池炭鉱からの生活補償を加えてさへ八割。

宿命背負い

たとえ入院を必要でなかったものの、まぎれもなくCO中毒患者の宿命を背負わされてしまった

吉田さんは、今は病院に通う身と

なつてしまった。

労災補償保険からの休業補償給付は六割。それに、三池労組が勝

ち取った三井三池炭鉱からの生活補償を加えてさへ八割。

ついに入院

それは昨年の、三月二十二日の朝だった。吉田さんは用便に立つたところ、不意に体の自由を失

ったとき、はいてきたスリッパを、

孫が二人

このごろの某日、吉田さんをたずねたのはよいが、玄関まで出迎えるときにははいてきたスリッパを、